

柏原屋絵本の研究

— 初期絵本を中心に —

総合研究大学院大学 文化科学研究科 日本文学研究専攻 古明地 樹

要 旨

大坂の書肆、柏原屋（洪川清右衛門、稱觥堂）は、洪川版と称される『御伽文庫』や、『女大宇宝箱』等を出版したことで知られる。一方で、鈴木春信をはじめとする浮世絵師に影響を与えた橋守国画作『絵本写宝袋』（享保五（一七二〇）年刊）、合羽摺り絵本の嚆矢となった大岡春卜画『明朝紫硯』（延享三（一七四六）年刊）等を刊行し、大坂を中心とした享保期以降の絵本流行を支えた板元の一つにも数えられる。これらの影響を考えれば、絵本研究の視点から柏原屋の活動を明らかにする意義は大きい。この考えに基づき、本稿では柏原屋の初期絵本を取り上げ、その出版活動を論じることで、享保期における絵本流行の一端を明らかにすることを目的とする。

享保五（一七二〇）年以前の成立となる柏原屋の絵本広告には、『絵本草源氏』『絵本清書帳』『絵本稽古帳』『絵本たから蔵』『絵本忘草』『絵本ふくらす、め』『絵本手帳綱目』『万物絵本大全』の八作品が載る。本稿では、これらを柏原屋が刊行した初期における絵本として取り上げ、その書誌を記すと共に作品の成立過程について考察することで、柏原屋の絵本出版の諸特徴を把握することに努める。

この伝本調査により、柏原屋の刊記を有する『絵本清書帳』は『絵本手帳綱目』を求板後に改修した内容を持つこと、板木の改修跡より『絵本稽古帳』や『絵本忘草』等の作品が求板版であること等が判明した。また、これらは伝本の少ない稀覯本であるが、上述の作品に対する考察や、作品の構成に改修によって生じたと推測される不和が認められることから、初期の柏原屋絵本が総じて後修本である可能性が高いと判断する。

『絵本手帳綱目』、『絵本ふくらす、め』、『万物絵本大全』を除く作品に柏原屋の刊記が確認され、全ての伝本が「享保三年五月」（一七二八）の年記を有する。しかし、刊記の分析を行った結果、これら八作品の印時期にはずれが生じている可能性があると推測できる。則ち、柏原屋は享保五年以前に八種の絵本板木を有していたものの、作品によって印・修の時期が大きく異なる可能性を指摘する。

キーワード：洪川清右衛門 絵手本 画譜 上方絵本 上方出版 絵本草源氏 絵本手帳綱目 絵本清書帳 絵本稽古帳 絵本忘草

- 一. はじめに
- 二. 『絵本草源氏』(図2・図3)
- 三. 『絵本稽古帳』(図4・図5)
- 四. 『絵本手帳綱目』(図6・図7)
- 五. 『絵本清書帳』(図8・図11)
- 六. 『絵本たから蔵』(図12・図13)
- 七. 『絵本忘草』(図14・図15)
- 八. 『絵本ふくらす、め』(図16・図17)
- 九. 『万物絵本大全』(図18・図19)
- 十. おわりに

一. はじめに

柏原屋(稱觥堂)は、洪川清右衛門を宗家とし、近世を通して活動をつづけた大坂の書肆である。洪川版の名で知られる『御伽文庫』(近世中期刊)や、『女大宝箱』(明和七(一七七〇)年刊)の刊行を行うなど、文学史上でも重要な出版活動を行った書肆であると言えるだろう。加えて、柏原屋の特徴は、多くの絵本を刊行したという点にも認められる。

鈴木春信をはじめ、多くの浮世絵師への影響が指摘される橘守国画作『絵本写宝袋』(享保五(一七二〇)年刊)^①や、合羽摺りを用いた絵本の嚆矢とされる大岡春卜画『明朝紫硯』(延享三(一七四六)年刊)^②は、共に柏原屋の刊行である。また、大森善清の絵本類^③、狩野派の画論や画法をまとめた林守篤著述『画筌』(享保六(一七二二)年刊)の求板を行うなど^④、柏原屋は絵手本・画譜を中心とした絵本の出版を積極的に行っていた。この意味で、絵本研究の視点から柏原屋の出版活動を明らかにする意義は大きいと考える。

しかし、柏原屋に限らず、書肆の活動を軸とした絵本出版に関する論考はこれまで多くはなされてこなかった^⑤。この現状を踏まえ、本稿では柏原屋の絵本に関する出版活動の把握を目指し、『絵本草源氏』に貼付される「絵本目録」に載る柏原屋の絵本八作品を調査し、各作品の書誌を記すと共に、作品内容、成立過程について考察するものである。

国文学研究資料館蔵『絵本草源氏』(享保三(一七一八)年刊)に貼付される「絵本目録」と題された柏原屋の広告(図1)には、『絵本忘草』、『絵本稽古帳』、『絵本清書帳』、『絵本手帳綱目』、『絵本ふくらす、め』、『絵本たから蔵』、『絵本草源氏』、『万物絵本大全』の八作品が載る。これらに続き、享保五(一七二〇)年刊の『絵本写宝袋』の刊行が予告されていることから^⑥、本広告は享保五年以前の成立であることが判明する。則ち、広告に載る八作品は享保五年以前に柏原屋が板木を所有していた作品であると考えられる。

現在、この広告を遡る成立時期となる例を見出せないことから、以下、この八作品は柏原屋による絵本刊行の初期作品に当たるものと判断する。なお、以下の作品は広告の掲載順とは異なる順序で取り上げるもの

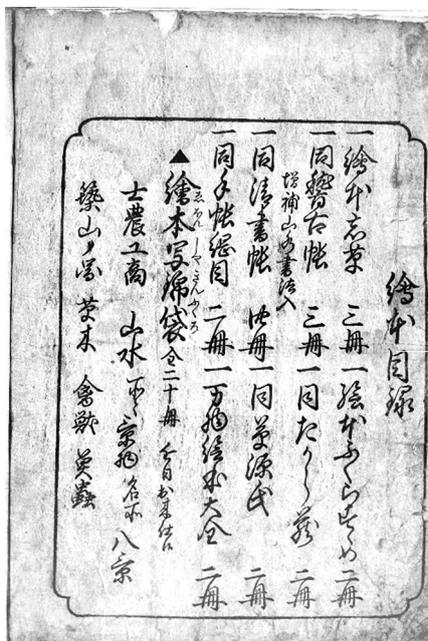


図1 「絵本目録」国文学研究資料館蔵『絵本草源氏』表紙見返し

とする。また、各作品を取り上げた後に述べる通り、これらの絵本の内、大本作品の刊記には跋文、年記、板元名を刻した三つの板木を組み合わせて刷られたと推定されるものが複数ある。これらに対する考察のため、以下では書型が大本の作品に関して、刊記における記述を内容ごとに区別して〈跋〉、〈年記〉、〈板元名〉と記し、「刊記」の語はこれらを総合したものとして用いるものとする。

二. 『絵本草源氏』(図2・図3)

①国文学研究資料館蔵本(12-494)、②早稲田大学図書館蔵本i(文庫30/A0233)、③早稲田大学図書館蔵本ii(文庫30/A0337)を確認している。その他、新日本古典籍総合データベースより東海大学中央図書館桃園文庫蔵本(桃10/122)、東京国立博物館蔵本が知られる。以下、①国文研本の書誌を記す。

大本、二巻一冊(合冊)。左上に外題簽(単郭)「くさげんし 近江八景 絵本草源氏 番之圖」。内題無し。上表紙見返しに広告を貼付(図1)。柱に「○上(下)け(丁付)」。飛び丁あり、上五丁目に「五ノ十」、下五丁目「五ノ十八」。上十三丁、下九丁、全二十二丁。序無し。〈跋〉「世間繪抄せうのいひつ類出るといへども、其形そのかたチ當風のまさかに、あたら当ざる處多し。此度たび一流りゆう／筆工ひつくの今様いまざうに仕出し令せしむ／板行はんかう者也」。〈年記〉「享保三戊戌年／五月吉日」。〈板元名〉「江戸日本橋南二丁目 小河彦九郎／京寺町松原上ル丁 菊屋七郎兵衛／大坂安土町一丁目 野田屋利右衛門／同心斎橋筋順慶町 柏原屋清右衛門」。

上巻部分は前半に「尋木」、「葵車あらしひ」等の源氏絵、後半に「都東八景」と題した景図を載せ、巻の終わりに「鏡団唐子の絵」を挿入する。源氏絵は全て人物を描かない留守模様となっており(図2)、「都東八景」



図3 『絵本草源氏』
①国文研本下巻(五ウ・六オ)

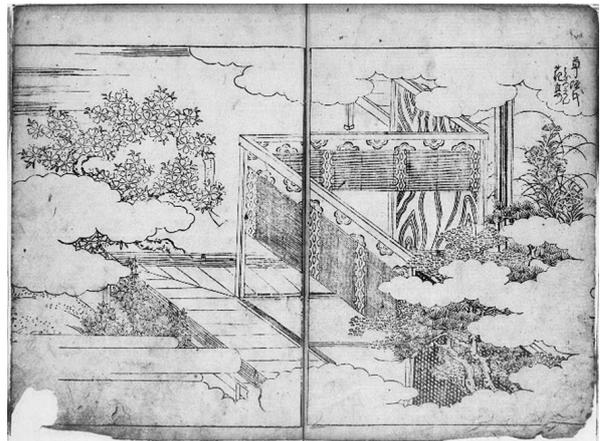


図2 『絵本草源氏』
①国文研本上巻(五ウ・六オ)

もその形式に倣う。下巻部分は前半に「源氏香之図」を載せ、次いで源氏絵が描かれた遊具である「貝合」、「貝桶」の図(図3右半丁)を挿入した後、和歌を伴う「近江八景」図を掲載する。続く源氏香の図は、源氏香の記号の他に『源氏物語』における巻名に応じたモチーフを併記している。例えば、「寄生」^{やどりぎ}では、鳥が松の木にとまる図、「夕顔」図では文字通り花としての夕顔の図が併記されている。また、この内、近江八景は上文下図で和歌を伴う形式で掲載される。和歌と絵を隔てる枠は雲形だが、上部の詞章を雲で囲む一般的な雲形郭線とは異なり、全てが下部の絵を囲むように使用されている点に特徴が認められる(図3左半丁参照)。柱刻にある「け」の一文字は、「源氏」の頭文字を取ったものかと思われる。

なお、確認した伝本は全て二巻一冊の合綴本、かつ内容的な差異もないが、使用された広告や刊記がそれぞれ異なっている。③早稲田ii本は表紙見返しに図1(①国文研本)と同じ享保五(一七二〇)年以前成立の広告を持ち、②早稲田i本は享保十五(一七三〇)年以降成立の広告を有する⁽⁷⁾。また、①国文研本、②早稲田ii本は享保三年の(年記)を持つが(後掲図21)、③早稲田ii本は(年記)に相当する箇所が欠けている(後掲図26)。

吉田幸一氏は『絵本草源氏』の絵師に関して、(跋)に「一流筆工、今様に仕出し」とある点より「享保年間で一流の絵師といえ、英一蝶(一六五二—一七二四)以外には見当たらない」とし、「享保初年に、『草源氏』の板元は、この絵本を一蝶に描かせたと断じて、大過ないものと思ふ」⁽⁸⁾と考察する。

しかし、画中詞に見る、肥瘦が強調された癖の強い字体(図3左半丁参照)が、後述する『絵本手帳綱目』に類似することから(図6右半丁参照)、本書も『絵本手帳綱目』の作者である吉村勝正画である可能性を考慮すべきかと思われる。

三、『絵本稽古帳』(図4・図5)

①国立国会図書館蔵本(237-14)、②内藤記念くすり博物館蔵本i(720/エ/45167)、③内藤記念くすり博物館蔵本ii(720/オ/45238)を確認している。この他、新日本古典籍総合データベースより仙台市博物館蔵本、武蔵野美術大学蔵本、佐賀大学附属図書館蔵本、カリフォルニア大学蔵本(上存)が知られる。②内藤i本は「下」存、③内藤ii本は「上」存だが同一本ではない。以下、完本である①国会本の書誌を記す。

大本、三巻一冊(合)。題簽欠。序題「大絵図稽古帳」。目録題「^繪稽古帳」。上巻表紙見返しに広告貼付。柱に、上「上(丁付)」、中下「古中(下)(丁付)」。飛び丁あり、下六丁目「六ノ九」。上二十一丁、中十三丁、下十三丁、全四十七丁。井村勝吉画。序に「それ哥人はいはねとも富士を目前にさとり/大海をむねの内にた、」

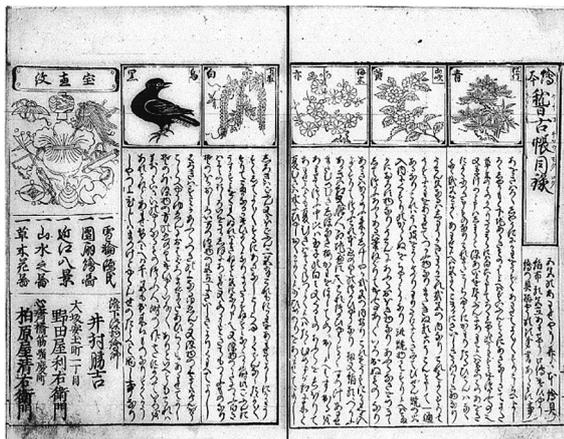


図4 『絵本稽古帳』
①国会本上巻(一ウ・二オ)

ゆる事情は道によりて／賢しといへとも凡形のなきは^{カタチ}功^{コウノウ}能^{ノウ}の筆工にも／うかます今爰にうつし侍るところの／繪本帳奥方局^{オウガタツボネ}雨中なるつれ／又は／ひいなかたなど好ましめんため則五色の繪の／具〔板様〕までこと／くあらはし初心御稽／古のたよりともならんかしと今板行者也〕。〔跋〕「世に繪本のしなまち／なり今図／するところは今様染のもやう又当世／はやり出のふくさたばこ入ななどのもやう／とりのたよりともなり侍らんかと令／板行世にひろむるなり〕。〔刊年〕「享保三戊戌年／五月吉日」。〔板元名〕「江戸日本橋南二丁目 小河彦九郎／京寺町松原上ル丁 菊屋七郎兵衛／大坂安土町一丁目 野田屋利右衛門／同心齋橋筋順慶町 柏原屋清右衛門」。

本書の特異な点の一つが目録の形式である。図4は序文の後に続く目録で、見開き四分の三程度を利用して「五色のあわせやう并二本絵具」等、彩色に関する解説を事例と共に載せる。左四分の一上部に「宝恵紋」が描かれ、その下に本書の目次、続いて絵師名と板元名が記される(図5)。目次には「雪輪源氏」「団扇絵図」「近江八景」「山水之図」「草木花図」と並ぶが、本書は「山水之図」までを上巻が占め、中下巻に「草木花図」が載る構成となっている。

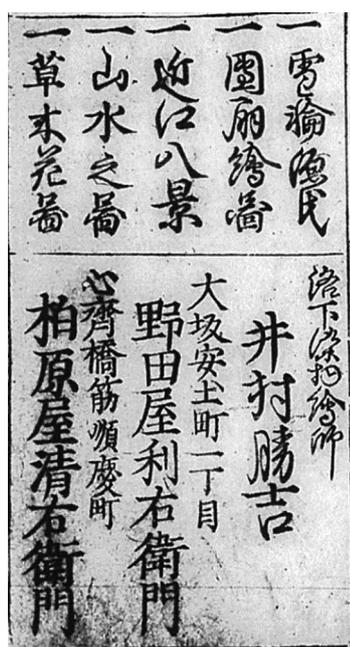


図5 『繪本稽古帳』
①国会本上巻(二才)部分

上巻「雪輪源氏」「団扇絵図」は、それぞれ雪輪、団扇の飾り枠を用いた源氏絵等の画題を載せる。「近江八景」は飾り枠にそれぞれの風景を載せ、漢詩・和歌を併記する。この源氏絵と近江八景を取り合わせる構成は、既述の『繪本草源氏』とも共通する。続く「山水之図」は、絵の手法を紹介するのではなく、山水木石に関する画法を伝える内容となる。中下巻は、半丁に一図から三図の草木花図を描き、その彩色注を併記する内容となる。内容面において一作品としての統一感を欠く点、上巻と中下巻で柱刻に差異がある点から、元は異なる作品であったものを取り合わせた可能性も考慮すべきかと思われる。

また、目次や板元名の筆致の差異に注目して検討した結果、板木の改修跡が認められた。図5に該当部分を載せた通り、目次の「雪輪源氏」「団扇繪圖」に認められる巻きの強い字体に対し、「近江八景」「山水之図」「草木花図」の字体はやや異なる。また、下部は「洛下染物絵師井村勝吉」の字体に対し「大坂安土町一丁目 野田屋利右衛門／心齋橋筋順慶町 柏原屋清右衛門」の字体が異なる。いずれも、後半の「近江八景」以下三項目、「大坂安土町一丁目」以下板元に関する記述の側に改修が認められる。

これらについて推測すれば、目次を改修した理由は、図1の広告中『繪本稽古帳』の項目に「増補山水書法入」とある事から、「山水之図」を増補したためであることが伺える。また、中下巻がそれぞれ十三丁からなる一方で、上巻が二十一丁である点は、十四丁目以降にこの「山水之図」を増補したためと考えられる⁹⁾。現在、改修前の伝本は確認できていないが、板元名の側に改修が認められることから①国会本『繪本稽古帳』、③内藤ii本(上存)は、野田屋、柏原屋らによる求板版であると推定できる。ただし、「近江八景」以下三項目の字体と、「野田屋利右衛門」ら板元名と所在地の字体も異なっていることから、目次の改修に次いで、板元名の改修は別時期に行われた可能性がある。これらの正

確な成立を明らかにできる資料を持ち合わせておらず、増補や求板の時期については定かでないが、柏原屋の広告が増補について記していることから(図1参照)、求板後に増補が行われたと考えておきたい。

絵師である井村勝吉は、「洛下染物絵師」とされている通り、京都で活動した人物とされる。本書の他、『新板和国ひなかた大全』(元禄十一(一六九八)年刊)『丹前雛形』(宝永元(一七〇四)年刊)、『風流雛形大成』(正徳二(一七二二)年刊)にその名が確認される。『稽古帳』を除いて、作品は全て小袖雛形本であり、「染物絵師」の肩書は、文字通り染物の意匠を描いたためにつけられたものであると思われる。丸山伸彦氏の指摘によれば、はじめ井村勝吉の作品は江戸の西村利右衛門、京都の竹田治右衛門といった板元から刊行されたが、後に京都の藤屋治右衛門と組むようになったという¹⁰⁾。この事を踏まえれば、柏原屋、野田屋による求板前の『稽古帳』の板元もまた、いずれかであった可能性がある。

四 『絵本手帳綱目』(図6・図7)

現在、『絵本手帳綱目』の完本は確認できていない。「上」存である①石川県立歴史博物館蔵本(720-5)、②個人蔵本、そして「下」存となる③早稲田大学図書館蔵本(文庫31/E0445)、④内藤記念くすり博物館蔵本(720/エ/45927)を確認している。以下、①石川歴博本、③早稲田本の書誌を記す。

①石川県立歴史博物館蔵本

大本、一冊(上存)。左上に外題簽(後補、子持ち枠、墨手書き)「絵本手帳綱目」。柱に「○ 上(丁付)」。二二丁存(二二丁目に欠損)。序に「夫絵は心の至所に其形手をとむ／されば空中より自然と徳をそなへり／(仍)之人々藝古たるべき道にあらずや／爰に題号す

る所濃絵本手帳綱目と名づけて今様用ゆべき分令^二開板^一染方好ましめ後たよりととなり侍べらんかしとなん。刊記なし。広告なし。吉村勝正画(目録による)。

③早稲田大学図書館蔵本

大本、一冊(下存)。左上に外題簽(単郭)「^大絵本手帳綱目^{諸鳥之図}貞」。柱に「○ 下(丁付)」。全十九丁。序無し。〈跋〉「世間繪抄類出るといへども其形手當風のまさかに^{あた}当ざる處多し此度一流^{ひつ}筆工の今様に仕出し令^{せしむ}板行者也」。〈年記〉「正徳三閏五月吉日」〈板元名〉「板木師一条智恵光院西江入町治右衛門/山田氏」。広告なし。

上巻は「老松」、「蔦葛」に始まる草木図を、その植物が対応した四季の記述と共に載せ、下巻は「鳳凰」に始まる鳥類、「蒲公英」等の野草、「浅瓜」や「枇杷」といった野菜、果物を載せる。上巻(①石川歴博本)の「絵本手帳目録」に「春夏秋冬をわかつ事」諸木繪圖之事／草花繪圖之事／諸鳥大鳥繪圖之事／同小鳥寄繪圖之事／くだ物折枝繪圖之事／水邊蘋繪圖之事」とあり(図6右半丁)、前半三つが①石川歴博本の内容と、後半四つが③早稲田本の内容と一致している。さらに図1で掲げた広告に『絵本手帳綱目』が「二冊」と載ることから、伝本の欠損はあるものの、①石川歴博本、③早稲田本でおおよその内容を把握できると考えられる。

①石川歴博本は、二二丁目が大きく破損しており、二二丁目以降にも内容が続いていた可能性がある。詳細は後述するが、柏原屋の刊記を持つ『絵本清書帳』は、『絵本手帳綱目』の「上」「下」巻(上巻…①石川歴博本、下巻…③早稲田本)を取り合わせ、改修したものであると推定できている。今、この『絵本清書帳』(①都立中央図書館蔵本)と『絵本手帳綱目』①石川歴博本を比較すれば、図様が連続していることから、

少なくとも「杜若」「九輪草」「薔薇」の図様が描かれた二二丁目は存在していたと考えてよいだろう。

③早稲田本は「板木師」の意味がやや不明瞭だが⁽¹¹⁾、京都の山田氏が板元とみてよいか。ただし、跋文と刊記の筆致に隔たりがある事から、この時点で刊記の改修が行われていた可能性もある(後掲図20)。⁽¹²⁾④内藤本は〈年記〉を欠き、かつ〈板元名〉に虫損が多く断定はできないが、天王寺屋一郎兵衛の他、複数書肆の相板で刊行されたものと思われる。⁽¹³⁾③早稲田本、④内藤本共に、『絵本清書帳』への取り合わせによって削除された図を含む(図7左半丁)⁽¹⁴⁾。改修後、再び原形に戻したとも考え難いことから、山田氏、及び天王寺屋らの刊行は、いずれも柏原屋の刊行に先行すると考えられる。このことから、柏原屋は『絵本手帳綱目』をいずれかの書肆より求板したと考えて良いだろう。

また、①石川歴博本、③早稲田本の内容より、『絵本手帳綱目』の内容がある程度把握できるとしたが、現在柏原屋の刊記を持つ伝本は確認できておらず、①石川歴博本、③早稲田本と同様の形式で柏原屋が刊行したとは限らない。唯一『絵本手帳綱目』の外題簽を持つ②個人蔵本が延享二年以降成立の柏原屋刊行となる絵本広告を有する。ただし、内容は後述する『絵本清書帳』の上巻と一致しており、獣や龍図、魚や虫の図を載せ、同じ『絵本手帳綱目』の書名を持ちながら、①石川歴博本とは別書となる。

享保十五(一七三〇)年以降に成立した柏原屋の絵本広告⁽¹⁵⁾では、『絵本手帳綱目』の広告文に「禽獸虫魚」とあり、以降の広告でも同様の紹介がなされる⁽¹⁶⁾。広告の記述通りであれば、草木図を載せた『絵本手帳綱目』①石川歴博本、及び③早稲田本の後半が、柏原屋の販売した『絵本手帳綱目』に採用されていないことになり、さらに「獸虫魚」部分を他書より取り合わせたことになる。この「獸虫魚」が、『絵本手帳綱目』②個人蔵本、則ち『絵本清書帳』上巻の内容と一致すること、

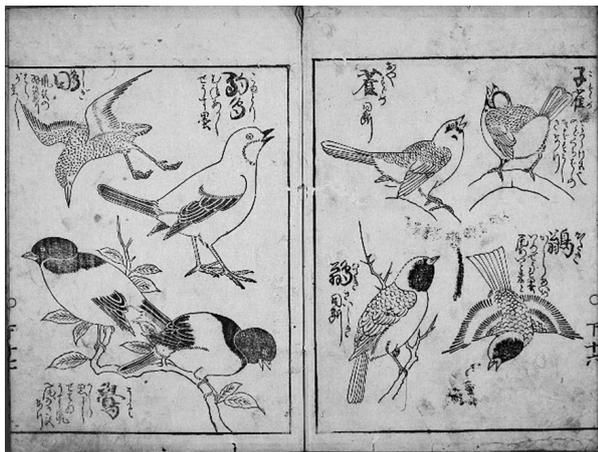


図7 『絵本手帳綱目』
③早稲田本(十六ウ・十七オ)

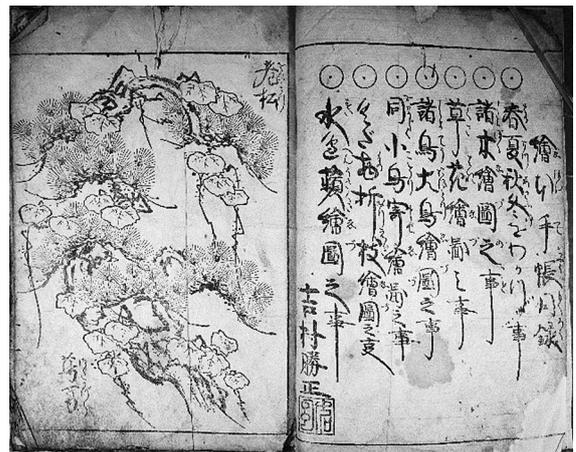


図6 『絵本手帳綱目』
①石川歴博本(一ウ、二オ)

後述する『絵本清書帳』の下巻が『絵本手帳綱目』下巻(③早稲田本)より草木図を除いた内容であることから、柏原屋は『絵本清書帳』より「禽獸虫魚」に相当する上下巻のみを取出し、これらを流用して『絵本手帳綱目』として刊行した可能性が指摘できる。

最後に、本書における強い癖字と絵師について取り上げておきたい。図6右半丁に見る通り、改修前の本書の字体に肥瘦が目立つ癖字が確認される。この字体と類似したものが、先に挙げた『草源氏』にも確認されることから(図3参照)、この二書は同一の筆工によるものかと推測される。ただし、両書ともに長文の記述を伴わないことから、別に筆工を立てず、文字を絵師が兼任している可能性もある。このことから、先に挙げた『草源氏』が本書と同様、吉村勝正の手による可能性があることを指摘しておく。ただし、絵師の吉村勝正に関しては現在未詳であり、今後の課題として調査を続けたい。今、少々の特長について述べるならば、葉脈や羽毛に及ぶ精細な描き込みや、薄や柳等の線状に描く植物に対し装飾的に白や黒の丸を描き入れる点等が見出せている。これらの特長は、先に吉村勝正画と推測した『絵本草源氏』にも確認できる。

五 『絵本清書帳』(図8～図11)

①都立中央図書館蔵本(加4812) ②国会図書館蔵本(W166—N12)、③早稲田大学図書館蔵本(文庫31/E0446)、④三原市図書館蔵本、⑤国会図書館蔵本(特1—333)⁽¹⁵⁾を確認している。③早稲田本は中巻存、④三原市本は中下巻存、⑤国会本は下巻存である。この他、新日本古典籍総合データベースより八戸市立図書館蔵本(南10/8)、東海大学中央図書館蔵本(桃10/147)が知られる。以下完本である①都立中央本の書誌を記す。

大本、三卷三冊。左上に外題簽(单郭)上「大絵本清書帳職物之図」

中「大絵本清書帳諸木之図」下「大絵本清書帳草花之図」上表紙見返しに広告貼付。柱に「○上(中:下) (丁付)」。中十三丁目に「十五初」。飛び丁あり、中十一丁目に「十一ノ三」。上十七丁、中二十五丁、下十六丁、全五十八丁。序無し。〈跋〉「世間繪抄類出るといへどもそのかた其形たうふうチ當風のまさかにあたら当ところおほ多し此度このたび一流りゅう／筆工の今様いまように仕出し令せしむ「板行はかう」者也」。〈年記〉「享保三戊戌年／五月吉日」。〈板元名〉「江戸日本橋南二丁目 小河彦九郎／京寺町松原上ル丁 菊屋七郎兵衛／大坂安土町一丁目 野田屋利右衛門／同心斎橋筋順慶町 柏原屋清右衛門」。

上巻は「獅子」、「虎」に始まる動物類、後半に「鯉」や「蟹」等の魚貝類や龍等、最終一丁半に虫類の図を掲載する。同じモチーフを複数の角度から描いた図が多く含まれ、また動物類の図には親と子の図を並べる例が複数確認できる。中巻は「老松」、「蔦葛」に始まる草木類の図を載せ、多くが連想される四季の記述を伴う。下巻は鳥類の図を載せ、彩色注や、鳥と合わせて描かれることの多い草木類の図を掲載する。

①都立中央本は享保三(一七一八)年の〈年記〉を持つが、添付された広告から、現在の形式となったのは宝暦五(一七五五)年以降と判断できる⁽¹⁶⁾。挙げた資料中最も早い成立の広告を有する伝本は②国会本であり、貼付された広告は図1と同じ享保五年以前の成立である。ただし、②国会本は前掲『絵本草源氏』③早稲田ii本と同じく〈年記〉を欠き、板木の摩耗や欠けも多く見られるため、安易に印時期を早く置くことはできない(後掲図29)。刊記や印時期等の問題は他作品を交え後述するものとし、以下『絵本清書帳』の伝本に関わる諸事項について考察する。

まず、先に触れた『絵本手帳綱目』からの引用に関する問題を取り上げる。『絵本清書帳』中下巻は、『絵本手帳綱目』①石川歴博本、③早稲

田本を取り合わせた上で改修して成立している。具体的には、序文や目録、及び「駒鳥」等の一部鳥図（図6左半丁）の削除、および画題の入れ替えが生じている。この入れ替えとは、改修前の『絵本手帳綱目』における画題配列が、〈草木図…上巻〉、〈鳥図…草木図…下巻〉であったものを、改修に際し板木を並び替え、〈全草木図…中巻〉、〈鳥図…下巻〉としたことを指す。これは、柏原屋が巻ごとに掲載する画題の分類を行おうとした意図に基づいていると考えられる¹⁷⁾。この改修によって画題配列の整合性は増したが、本来『絵本手帳綱目』上巻が草木図に四季を併記するのに対し、下巻は四季の併記を伴わないことから、形式的な

統一感を欠く結果になった（図8・9参照）。
 では、取り合わされた『絵本清書帳』の上巻とは何か、また取り合わせはどの時点で行われたか。今、この疑問に答える確実な資料を持ち合わせていないが、肥瘦が特徴的な字体や絵の筆致から推測すれば（上…図10、下…11参照）、この上巻も『絵本手帳綱目』と同じく吉村勝正画である可能性がある。この推測が正しければ、この上巻部分も『絵本手帳綱目』と同時期に求板された作品から引用されたと考えられる。
 また、この疑問に関わる問題点として、『絵本清書帳』下巻の外題簽に「草花之図」とある一方、描かれているのは鳥類の図であるといった

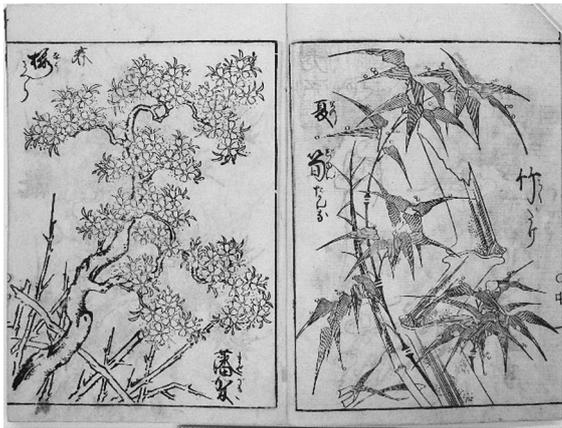


図8 『絵本清書帳』
 ①都立中央本中巻（一ウ・二オ）

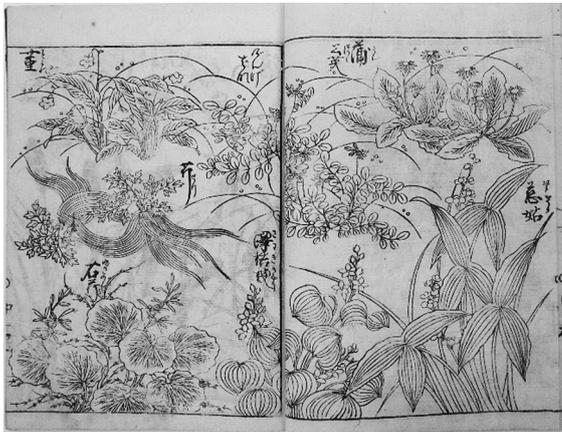


図9 『絵本清書帳』
 ①都立中央本中巻（十一ウ・十二オ）

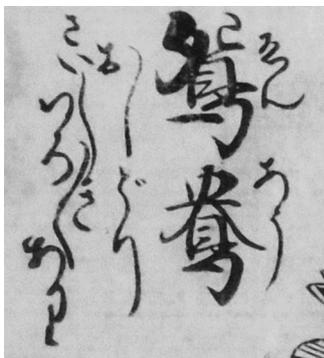


図11 『絵本清書帳』
 ①都立中央本下巻（三オ）部分

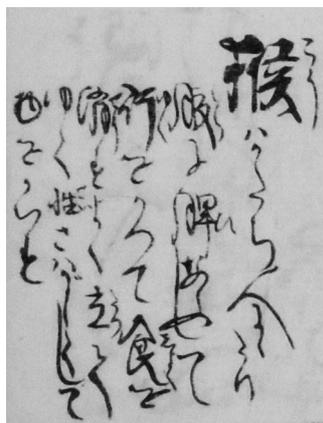


図10 『絵本清書帳』
 ①都立中央本上巻（七オ）部分

齟齬を取り上げる。①都立中央本下巻の他、②国会本、③早稲田本の下巻にも同外題簽を付しているため、伝本成立時から題簽の齟齬は生じていたと考えてよい。既述の通り、『絵本清書帳』下巻の内容は『絵本手帳綱目』からの抜粋であり、改修前の状態であると推測される『絵本手帳綱目』③早稲田本には「諸鳥之図／五穀類之図」と、内容と一致した題簽が正しく付される。

この問題に対し考えられる可能性としては、『絵本手帳綱目』や実見し得た『絵本清書帳』伝本の他に、別版の『絵本清書帳』が存在しており、その三巻目に相当する題簽を流用したものではないかと推測する。柏原屋刊行の絵本に添付される広告文には、『絵本清書帳』について「草木禽獸蟲魚」⁽¹⁸⁾、「諸木草花鳥獸虫魚之図悉く記す」等と紹介されており⁽¹⁹⁾、外題簽とは異なり、鳥の図が描かれていることが正しく認識されている。ただし、享保五（一七二〇）年以前に成立したと考えられる広告（同図1）や、享保十年から享保十二（一七二七）年の間に成立したと考えられる広告⁽²⁰⁾、また享保十四（一七二九）年刊の『新撰書籍目録』等には全四冊の刊行と載り、三巻三冊形態である伝本との間に齟齬が生じている。三冊本の形式で掲載されるのは、管見の限り享保十五（一七三〇）年以後の成立となる広告以降であることから⁽²¹⁾、元は四冊の形式で刊行されていたものが三冊本に改修された可能性が指摘できる。このことから、元は四冊本形式時に使用された外題簽が、三冊本形式に改修された後にも流用されたのではないかと考える。

『絵本手帳綱目』、『絵本清書帳』に関する考察を以下にまとめる。

『絵本手帳綱目』は、柏原屋による求板がなされ、別書と取り合わせて『絵本清書帳』に改修された。この時、『絵本清書帳』は四冊本として制作されたが、後に伝本の三冊本形式となった。一方で『絵本手帳綱目』の書名は改修後も残っており、「禽獸虫魚」に相当する『絵本清書帳』上下巻を流用し二冊本として刊行された。後掲図32に図解を示す。

現在のところ、以上の内容はあくまで伝存資料をもって行った推測であり、柏原屋の刊記を有する『絵本手帳綱目』や四冊本形式の『絵本清書帳』といった資料の搜索が俟たれる。

六・『絵本たから蔵』（図12・図13）

確認できた伝本は、①ポストン美術館蔵本i、②ポストン美術館蔵本iiのみで、現在までに実見できた資料はない。以下、データベースの記述をもとに両伝本の書誌を記す⁽²²⁾。

①ポストン美術館蔵本i

大本、一冊。左上に外題簽（子持ち枠）貼付、「絵本たから蔵」^く。柱に「宝上（丁付）」。飛丁あり、六丁目に「六ノ十」。全十四丁。序無し。

②ポストン美術館蔵本ii

大本、一冊。左上に外題簽（枠無し、墨写、後補）「繪本模様雛形 全」。柱に「宝上（丁付）」。飛丁あり、八丁目に「九ノ十三」。全十二丁。「丁付が三から五に飛ぶが、欠けがあるか。」〈跋〉「世に絵本のしなまち／＼なり今図／するところは今様染のもやう又当世／はやり出のふくさたばこ入なんどのもやう／とりのたよりともなり侍らんかと令／板行世にひろむるなり」。〈年記〉「享保三戊戌年／五月吉日」。

〈板元名〉「江戸日本橋南二丁目 小河彦九郎／京寺町松原上ル丁 菊屋七郎兵衛／大坂安土町一丁目 野田屋利右衛門／同心斎橋筋順慶町 柏原屋清右衛門」。

②ポストンii本の表紙は明らかに後補であり、題簽の「繪本模様雛形」も後の貼付であることから、これは原題ではないと判断される。また、柱の「宝上（下）」が対応し、内容にも違和感がないため、『絵本たから蔵』

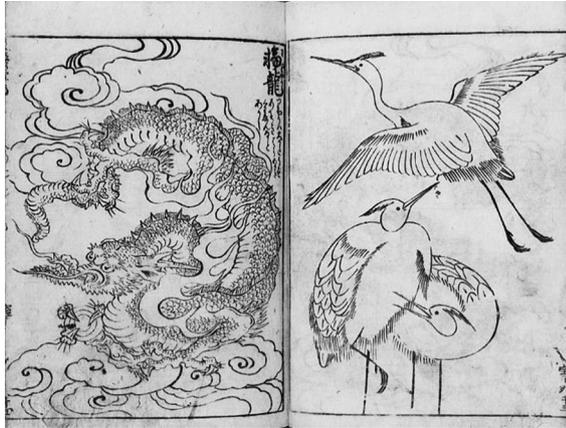


図13 『絵本たから蔵』
②ボストンii本 (九ウ・十オ)



図12 『絵本たから蔵』
①ボストンi本 (二ウ・三オ)

の下巻に相当すると推定できる。ただし、①と②が同一本であったかは実見できていない現在のところ判断できない。

上巻は「鳳凰」、「鶴」に始まる鳥類の図を、彩色注等と共に記す。下巻の前半は「唐獅子」、「獏」に始まる動物類を彩色注等と共に載せ(図12)、後半に「鯉」や「蟹」等の魚貝類の図を付す。下巻九丁目裏に、内容的には上巻に位置すべき白鷺図があること(図13)、魚貝類の図様に注釈を伴わないこと等、統一感を欠く構成が見られることから、『絵本清書帳』等と同じく複数作品の取り合わせによる後修本である可能性もある。

七. 『絵本忘草』(図14・図15)

①都立中央図書館蔵本(加4674) ②内藤記念くすり博物館蔵本(913/エ/41002)、③国立国会図書館蔵本i(特7-553)、④国立国会図書館蔵本ii(238-31)、⑤岩国徴古館蔵本を確認している。その他、新日本古典籍総合データベースより玉川大学教育学術情報図書館蔵本(W721-エ)、京都大学附属図書館蔵本等が知られる。以下①都立中央本について記載する。

半紙本、三巻一冊(合)。左上に外題簽(子持ち杵(後)貼付、「絵本忘草」。表紙見返しに広告(同図1)あり。柱には、上二丁目「下向き双鱼尾 繪本上 一」二丁目以降「忘草上(中・下) (丁付)」。飛び丁あり、上七丁目「七ノ十二」、中巻十丁目「十ノ十二」、下八丁目「八ノ十一」。序無し。跋無し。刊記「享保三戊戌年五月吉祥日 / 江戸日本橋南二丁目 小河彦九郎 / 京寺町松原上ル丁 菊屋七郎 兵衛 / 大坂心齋橋筋順慶町 柏原屋清右衛門」。刊記は飾り子持ち杵。

本書は、一丁表に狸々の図を載せた後、「松」、「柳」に始まる草木図を掲載し、その解説を行う。「松」(一ウ)から「篠笹」(十八ウ)にか

けては半丁に一つの草木を取り上げ、関連する画題を横に付す形式となり、上文下図にて解説を行う。「藤」(十九才)以降は半丁に二図、上下に分割して草木を取り上げ、喉の側に文章、柱の側に絵を載せる。

②内藤本、③国会本は、後述する『絵本ふくらすゝめ』との取り合わせ本(『絵本忘草』三冊、『絵本ふくらすゝめ』二冊の合綴)で、②内藤本には刊年が記されず、板元名のみ「書林 大坂心斎橋順慶町 洪川清右衛門」とある。②内藤本の表紙見返しには①都立中央本や図1と同じ広告が貼付され、合綴時に前後したのか、前半の『絵本忘草』部分は上・中・下の順で並ぶ。③国会本は刊記を欠くが、『絵本忘草』上・中・下の順で合綴されている。これらの例から、『絵本忘草』と『絵本ふくらすゝめ』は、取り合わせて販売されていた可能性が指摘できる。

延享二(一七四五)年以降に成立した柏原屋の広告に⁽²³⁾、『絵本忘草』が一冊本として載り、広告文には「鳥獸龍虫魚諸木草花つるの物不残図をあらはし異名を付悉く記す」と、草木のみならず鳥獸等『絵本ふくらすゝめ』所収の内容を含むことが記されている。このことは、両書が取り合わせ本として販売されていたことの証左になり得る。また、この広告成立以前、享保十(一七二五)年から享保十二(一七二七)年の間に成立した広告⁽²⁴⁾、及び享保十五(一七三〇)年以降に成立した広告には⁽²⁵⁾、既に『絵本忘草』が「草木禽獸蟲魚」の内容を持つと書かれている。ただし、これらは全三冊と掲載していることから、未確認ではあるが、先に示した五冊合綴形態以前に『絵本忘草』と『絵本ふくらすゝめ』を取り合わせた上で三冊本として販売していた期間があった可能性もある。

④国会本は四冊本で伝わり『絵本忘草』三冊(上中下)と『絵本ふくら雀』一冊(上下合綴)の取り合わせ本となる⁽²⁶⁾。全冊が後補の布目地青色表紙、及び手書きの外題簽を有する。『絵本忘草』上巻表紙見返しに享保五(一七二〇)年以前成立の広告(同図1)が貼付され、『絵本ふくら雀』裏表紙見返しに『民家萬宝増補昼夜重宝記』の広告が貼付

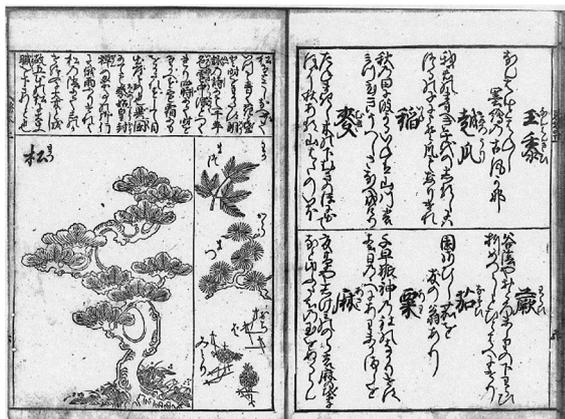


図15 『絵本忘草』
⑤岩国本(五ウ・六オ)



図14 『絵本忘草』
①都立中央本(二ウ・三オ)

される。この広告中に、「柏原屋清右衛門」の名が確認される。『増補昼夜重宝記』は正徳四（一七一四）年刊の伝本が確認されるが、本広告は板木の摩耗が激しいことから、これより大きく下る印であると推定される。また、『絵本ふくらすゝめ』下巻相当部に錯簡が見られること、表紙等が後補であることから、四冊本形態は後の改修によるもので、元は②内藤本、③国会i本と同様に一冊本形態であった可能性もある。

ここまですり上げた伝本に対し、⑤岩国本は上のみが伝わる端本だが、①都立中央本等にはない序文（一オ・ウ）や目録（二オ〜五ウ）が備わっている。また、①都立中央本上巻には始まりに「狸々図」（一オ）、「松」（一ウ）が掲載されるが、⑤岩国本の対応箇所においては狸々図がなく、「松」（六オ）の図様も異なり、下部が左右に分割された形式になる⁽²⁷⁾。さらに①都立中央本は、⑤岩国本にある「櫻」の記事を欠いている。

このように⑤岩国本とその他の伝本との間に差異が認められるが、いずれの成立が先行するかという問題が生じる。「松」図に続く「柳」図は、いずれの伝本においても共通した内容となる（図14左半丁）。ここでは上右下形式を採用し文章と図像を配置するが、さらに下部を左右に分割し、右部分に「やなぎにまり」、「さくらをこきませ」、「いとやなぎ」といった関連画題三図を併記している。ここで①都立中央本と⑤岩国本の「松」の記事を比較した時（図14右半丁・図15左半丁）、①都立中央本が図を左右分割せず、一図として複数の松が描かれるのに対し、⑤岩国本では絵の枠を左右に分割し、「わかまつ」、「からまつ」、「おちばみとり」の三図を併記している。則ち、⑤岩国本の方に後続の「櫻」、「柳」の記事との整合性が認められ、①都立中央本にない「櫻」図も同様の構成であることから、①都立中央本〜④国会本は⑤岩国本の後修本であると判断できる。「狸々図」や「松」図は改修された図様であり、これに合わせ「櫻」図は削除されたと判断される⁽²⁸⁾。

これらのことをまとめると、『絵本忘草』の形式は以下の通りに変化

していたと考えられる。『絵本忘草』は、元々序文等を持つ⑤岩国本の形式であったものを改修し、①都立中央本の形式として販売された。後に『絵本ふくらすゝめ』と取り合わされ三冊本として販売、さらにその後『絵本ふくらすゝめ』と合綴され一冊本として販売されたものと推測できる。

八・『絵本ふくらすゝめ』（図16・図17）

本書に関しては、単独で伝わる完本を確認できておらず、先述した『絵本忘草』②内藤本、③国会i本、④国会ii本に取り合わせとして残るもののみを見る。以下、『絵本忘草』③国会i本より、『絵本ふくらすゝめ』に相当する部分の書誌を記す。

半紙本、五卷一冊（合）内四・五巻目が『絵本ふくらすゝめ』。左上に外題簽（後補）「花鳥づくし／ふくらすゝめ 合本」。柱には「すゝめ 上（下）（丁数）」。「飛び丁あり上八丁目に「八ノ十」、下三丁目に「三ノ八」。上十二丁、下九丁、全二十一丁。序無し。刊記なし。

内容は、魚や虫類を含む鳥獣図を取り上げ、『絵本忘草』十九丁表以降と同一の形式で文章を併記する（図16参照）。『絵本忘草』④国会ii本の例から、『絵本ふくらすゝめ』も同様に序文等を伴う伝本が存在する可能性があるが、今は伝本が『絵本ふくらすゝめ』の後修本である可能性が高いことを指摘するにとどめる。

九・『万物絵本大全』（図18・図19）

現在のところ、柏原屋の刊記を持つ『万物絵本大全』を確認していない。また、取り上げる完本は福井市立図書館蔵本であり、筆者は影印を確認したのみである。板元不明、上のみで伝わる端本は多く、都立中央図書

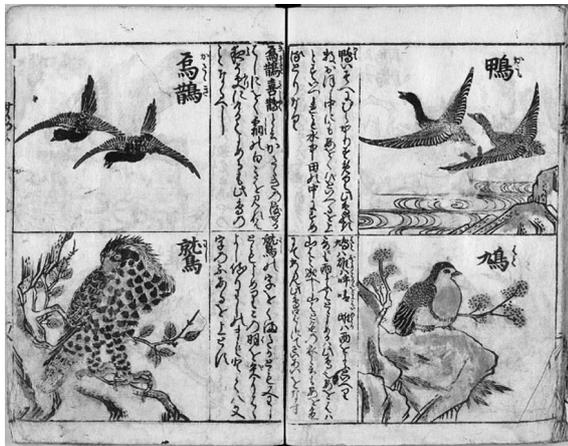


図17 『絵本ふくらすゝめ』下巻 (七ウ・八オ)
 (『絵本忘草』③国会本と合綴)



図16 『絵本ふくらすゝめ』上巻 (五ウ・六オ)
 (『絵本忘草』③国会本と合綴)

館蔵本等を確認している。以下、影印と長友千代治氏の解題に即して福井市立図書館蔵本の書誌を以下に記す²⁹⁾。

半紙三ツ切り本、二巻二冊。左上に外題簽(子持ちち枠)貼付、「万物絵本大全 上(下)」。目録題「萬物繪本大全重宝記」、下序題「二万物絵本大全統」。上表紙見返し半丁に序文貼付。下表紙見返し半丁に序文貼付。柱に、上「下向き双魚尾 凡例 二」(以下魚尾は共通のため省略)、「目録 三(四)」、「繪具 五(六)」、「名山 一(四)」、「天象 五(十)」、「地理 十一(二十)」、「居処 廿一(廿六)」、「人物 廿七(四十)」、「身体 四十一」、「衣服 四十二(四十八)」、「宝貨 四十九(五十六)」、「器用 五十七(九十八)」、下「山海 又九十三(又九十八)」、「畜獸 九十九(百五)」、「禽鳥 百六」、「禽鳥畜獸 百七(百十二)」、「禽鳥 百十三(百十四)」、「龍魚 百十五(百廿二)」、「虫介 百廿三(百卅五)」、「米穀 百卅六(百卅七)」、「菜蔬 百卅八(百四十四)」、「果蔬 百四十五(百五十)」、「樹竹 百五十一(百五十九)」、「花草 百六十(百七十五)」。全百八十六丁。上序に「いにしへより画本の書多く刊行はれて誠に世の重宝たり今此書は上天象より下万物を悉く其図を正し各々名義乃文字をあらため彩色の調要をあらはしあまねく撰ひ集め万物絵本大全重宝記」と名付けて世にひろむる事しかり、下序に「万物絵本大全統いにしへより山海経の書世に行はれて普く重宝といへとも児童の見る事あたはす故に其図を此書に撰ひとりて其名をひらかなにあらはしこれを蒙味の便りとすくはしき〇は本／書を見給は、「猶」幸／「甚」ならんか。刊記「画工下村氏 房供書之／元禄六癸酉歳 五月吉旦／大坂北太郎町心齋橋 書林 平兵衛／日本橋南一丁目 江戸 村上源兵衛」。

上巻は、半丁を三分割した形式を基本とし、「名山」、「人物」等の柱の内容に即した事物の図様を載せる。下巻は半丁を四分割した形式を基本とし、『山海経』より引用した図様をはじめ、「畜獸」、「禽鳥」等の柱に即した事物の図様を載せる。

外題に『万物絵本大全』の書名が認められるが、他に挙げた初期柏原屋絵本とは異なり横本であること、柏原屋の刊記を持つ伝本を確認していないことから同書であるとは断定できない。ただし、他作品と内容に大きな差異がないこと、後に「絵本出来目録」等の柏原屋広告に列挙される横本『萬寶全書』を刊行している例があることから、現時点では、同書であると考えたい。

この福井市本の他、リチャード・レイン氏による別本が報告されている⁽³⁰⁾。レイン本は書肆を「書林高屋平右衛門」と記しており、浅野秀剛氏は「字のバランスなどを勘案すると、福井市本→レイン本というふうに考えてよい」と述べる⁽³¹⁾。浅野氏によれば、いずれの書肆も元禄期に活動を終わっていることから、これらの伝本は柏原屋の求板に先んじて成立であると考えられる。

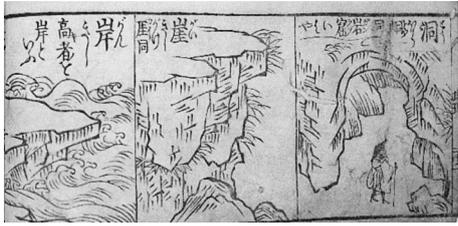


図 18 『万物絵本大全』上巻（十二ウ）

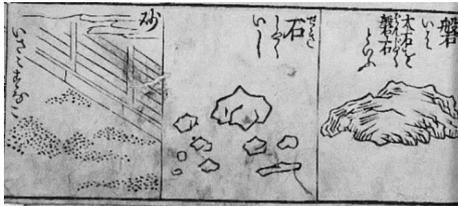


図 19 『万物絵本大全』上巻（十三オ）

本書には画工として「下村氏房供」と名が記されている。この名と描かれた人物の特徴から、浅野氏は、上方で活躍した絵師、志茂村七郎兵衛が手掛けたものとしている⁽³²⁾。志茂村七郎兵衛に関しては未だ詳細が明らかでないが、浅野氏はその筆致を「吉田半兵衛と似てはいるが、半兵衛ほど浄瑠璃の人形めいたところがなく、身体の造形も軟らかで、少し下膨れした、ほっこりした笑顔が特徴といえる」と評している。

また柏原屋は、享保九（一七二四）年に刊行された『類姓草画』に類板の疑いがあるとして、『万物絵本大全』の相板書肆らと共に訴訟を起こしている⁽³³⁾。

一大津屋与右衛門殿方ニ開板類姓草画、敦賀屋九兵衛殿・柏原屋清右衛門殿・吉文字屋市兵衛殿相板、万物絵本大全ニ差構候所有之候得共、絵之風義違申二付、与右衛門殿方御断故、右三人之衆了簡之上事済候、然上は万物絵本大全書直シ彫申節、類姓草画之絵ニ似候所少々有之候共、与右衛門殿より申分無之筈ニ而相済申候、已上

享保九辰十月

一 柏原屋清右衛門殿方ニ工商雑絵之板下出来仕掛有之候を、大津屋与右衛門殿江見せ被申候所、此分以後与右衛門殿方申分無之筈ニ候、已上

辰十月

柏原屋らの訴えは「絵之風義」が異なるため退けられた。嫌疑をかけられている大津屋与右衛門板『類姓草画』は、三卷三冊の大本で、古碯の手によって描かれた様々な職能の人物画を草筆で多く掲載する作品である。伝本には同内容で書肆を「田原屋平兵衛」とした『人物草画』の書名を持つものが確認されている。浅野秀剛氏は、享保九（一七二四）

年に『類姓草画』の書名で開板願が提出されていることから、『人物草画』を『類姓草画』の改題本であると判断した³⁴⁾。この事は、先に引いた訴訟記録に「大津屋与右衛門殿方二開板類姓草画」とあることから論者も同意する。

記録の通り、筆致で判断するならば、確かに両書は異なる作品である。一方で、『万物絵本大全』「人物」の項(二七ウ〜四一ウ)には、『類姓草画』と同じく多様な職能の人物が描かれており、いくつかの重複が認められる。この点における訴訟であったとすれば、柏原屋の広告に掲載される『万物絵本大全』は同書である可能性が高い。さらに、柏原屋の刊記を有する伝本は未見ながら、記録より、それが敦賀屋九兵衛、吉文字屋市兵衛との相板であったことを知る事が出来る。

十. おわりに

享保五(一七二〇)年以前に柏原屋が板木を有していたと考えられる八点の絵本について取り上げ、各作品の成立について考察を行った。これらは総じて伝本が少ないことから、未見資料を含め、今後も調査を続ける必要がある。現時点で推測される各作品の成立過程については、後掲付表に一覧を載せた。また、柏原屋の刊記を有する伝本は総じて後修本であると思われるものが多く、その殆ど、あるいは全てが求板版である可能性を持つ。これらの作品は、未確認の『絵本手帳綱目』、『絵本ふくらす、め』、『万物絵本大全』を除き、全てが「享保三年五月」の刊記を持つ。

ただし、『絵本草源氏』と『絵本清書帳』(図21・図23)、『絵本稽古帳』と『絵本たから蔵』(図22・図24)の間では、それぞれ〈跋〉を含めた刊記の流用が確認される。今、仮に前者を刊記A、後者を刊記Bとする。この内、「世間絵抄類」で始まる刊記Aの〈跋〉は『絵本手帳綱目』③早稲田本(図20)に確認できることから、柏原屋による求板以前の物

であると分かる。

浅野秀剛氏は、『絵本清書帳』①都立中央本の刊記(図23、刊記A)の成立に対し「三分の二を占める跋文と、左上の年記部分、そして左下の版元名の三つの版木を寄せ集めて構成したもので、もともと一枚の版ではなかった」と推測している。『絵本手帳綱目』③早稲田本(図20)の形式は、確かに〈跋〉と〈刊年・板元名〉の板木が異なっていたことを思わせ、『絵本草源氏』③早稲田本(図26)、『絵本清書帳』②国会本(図27)に見る左側匡郭と刊年の不自然な欠けから、本来この部分に相当する〈年記〉の板木が存在し、これが逸したことで生じた可能性が指摘できる。これらは浅野氏の推測の証左となるだろう。

このことから、刊記Bの〈跋〉も、他書より流用したものである可能性がある。また、両刊記の〈板元名〉について比較すると、筆致や、「小河彦九郎」と他板元名のインデントのずれ方等が類似していることが分かる。このことから、いずれかが一方の被せ彫りである可能性がある。あるいは、浅野氏の推測通り刊記Aが複数の板木の組み合わせで成立しているならば、刊記Bから〈年記〉と〈板元名〉の板木を切り出して利用した可能性もある。

刊記Bに比べ、刊記Aは総じて板木の摩耗が顕著であること、摩耗の進んだ刊記Bの伝本が確認できないこと、字高に大きな差が見られないことから、刊記Bの板木より〈年記〉、〈板元名〉を切り出したものと推測し、今は両刊記の印時期は異なると考えたい。則ち、享保五(一七二〇)年以前、八種の絵本板木を有していたものの、柏原屋における初印時期、販売時期は刊記に記された享保三(一七一八)年でない可能性が高いこととなる。紙幅の都合上、具体的な刊記の成立順序や印時期に関する考察は稿を改めるものとするが、最後に、初期の柏原屋絵本におけるいくつかの問題と展望を述べておきたい。

まず、作品間に印時期のずれがあることを述べたが、なぜ柏原屋は

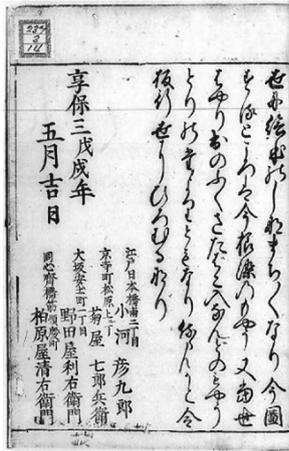


図 22 『絵本稽古帳』
①国会本（刊記B）

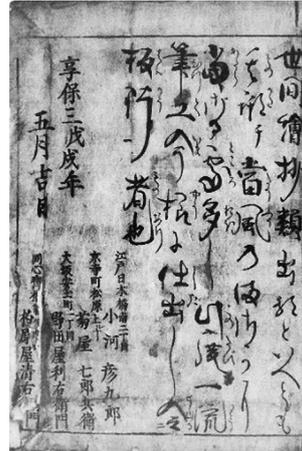


図 21 『絵本草源氏』
①国文研本（刊記A）

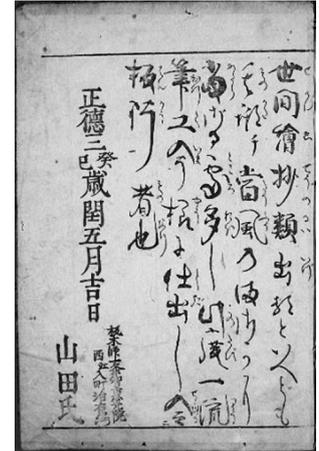


図 20 『絵本手帳綱目』
③早稲田本（求板前刊記A）

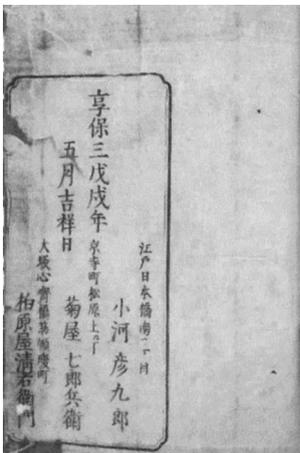


図 25 『絵本忘草』
①都立中央本（半紙本刊記）

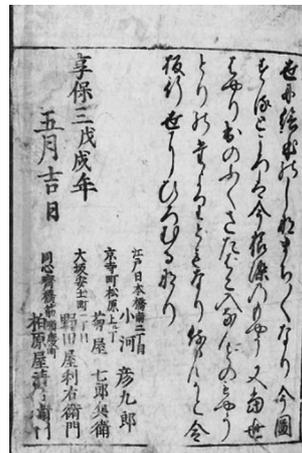


図 24 『絵本たから蔵』
②ポストン ii 本（刊記B）

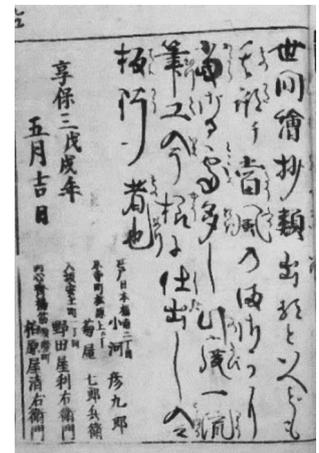


図 23 『絵本清書帳』
①都立中央本（刊記A）



図 28 『絵本草源氏』
①国文研本（刊記A）

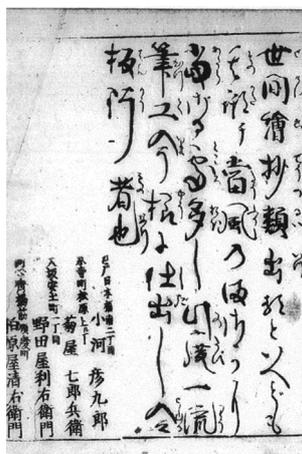


図 27 『絵本清書帳』
②国会本（刊記A）

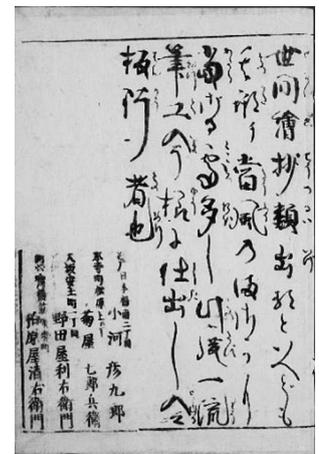


図 26 『絵本草源氏』
③早稲田 ii 本（刊記A）

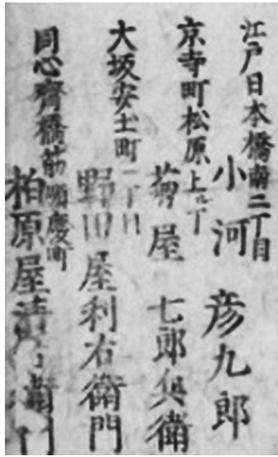


図31 『絵本たから蔵』
②ポストンii本（刊記B）

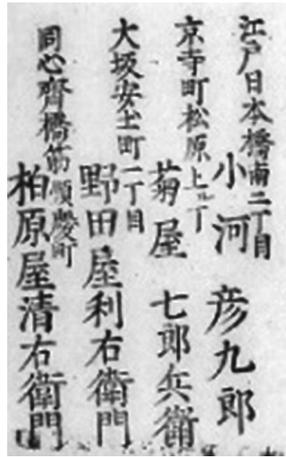


図30 『絵本稽古帳』
①国会本（刊記B）

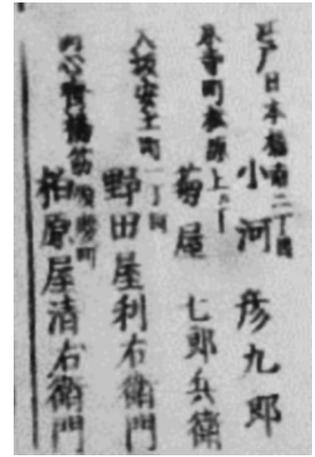


図29 『絵本清書帳』
①都立中央本（刊記A）

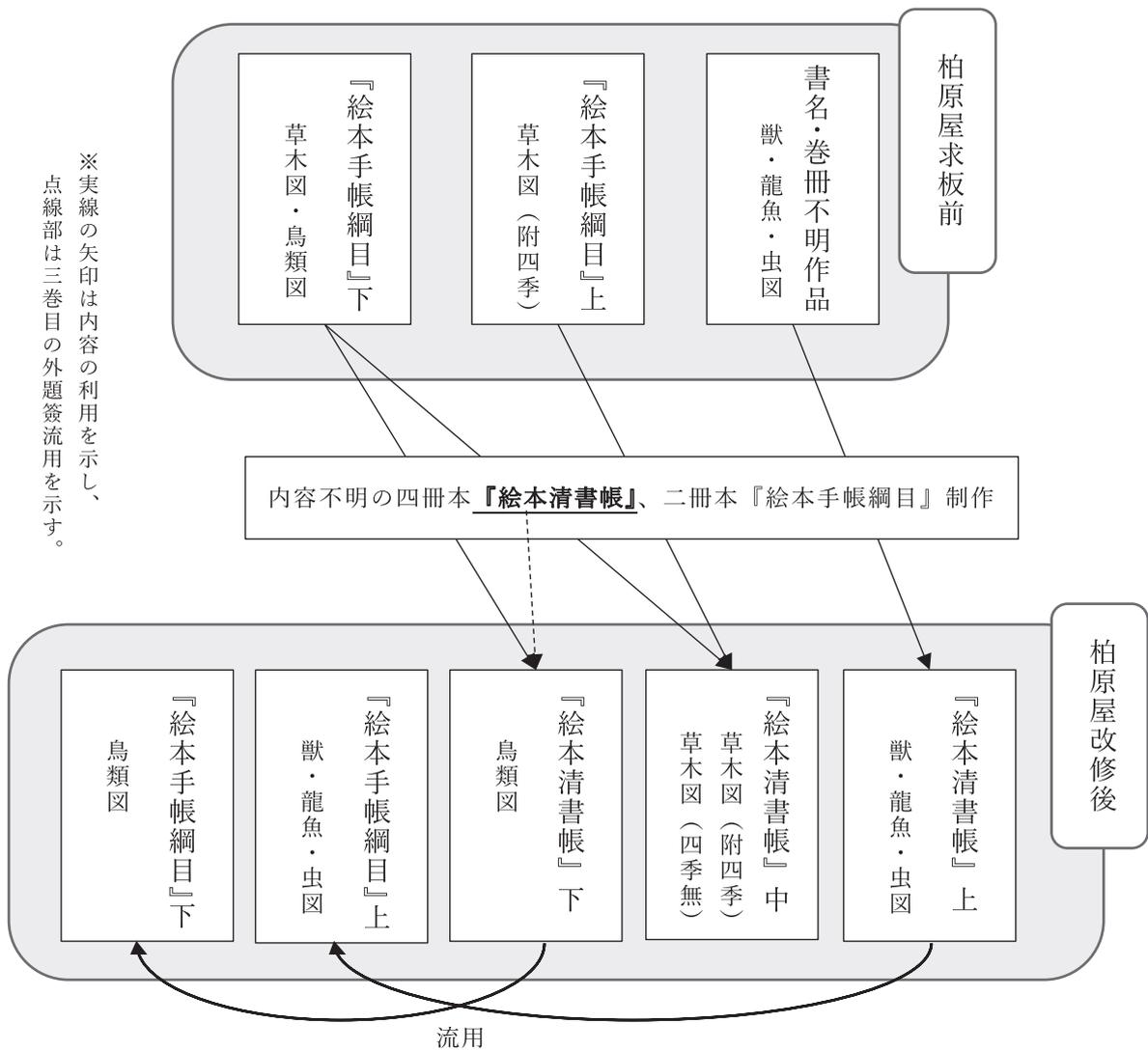


図32 『絵本手帳綱目』、『絵本清書帳』の改修過程

「享保三年五月」の〈刊年〉にこだわっていたのかという問題が挙げられる。詳述は避けるが、柏原屋は享保二十年以降に入手した『絵本深山鹿』の板木にも「享保三年五月」の〈刊年〉を持つ刊記Aを流用して刊行している。

また、作品内容に関して述べるのであれば、取り上げた八作品は、掲載する画題の多くに重複が認められるという問題が挙げられる。『絵本稽古帳』、『絵本草源氏』は共に源氏絵や「近江八景」図を掲載し、その他の絵本は草木図、禽獣図等を共通して掲載している。

これらの問題の背景には、絵本出版における一領域の独占を狙った柏原屋の出版戦略が関わっていると考えたい。互いに重複した画題を掲載し、これらを同時期に出版する商法は効率が悪い。であれば、柏原屋の版木収集には販売とは別の目的を想定するべきだろう。先述した『万物絵本大全』に関する類板訴訟や、『絵本深山鹿』の板木も訴訟によって入手していることを踏まえれば、同種の絵本板木を集めた背景には、他書肆に対して絵本刊行を牽制する目的があったのではないかと思われる。これについては、他作品や周辺の類板に関わる訴訟記録等を用いながら、稿を改めて論じ、享保期以後の大坂における絵本出版に関して考察を進めるものとした。

注

(1) 後続の浮世絵師に対する守国の影響に関しては、先行研究に多くの指摘がある。今、全てを挙げることは困難だが、守国の影響を中心に取り上げた論考として、田中順子「守国絵本からの図柄の借用」『実践女子美学美術史学』7号(一九九二)、星野鈴「鈴木春信と『絵本写宝袋』」『江戸の出版文化から始まったイメージ革命』絵本絵手本シンポジウム報告書(二〇〇七) 四九―六二頁、を挙げておくものとする。

(2) 大阪市立中之島図書館蔵『開版御願書扣』によれば、『明朝紫硯』は延享四(一七四七)年十一月に柏原屋清右衛門より開板願いが提出されている。ただし、伝本の内、確認できる最古の資料は延享三(一七二六)年の刊記を持ち、出版時期に錯誤が見られる。浅野秀剛氏は、実際の刊行は開板願いが出された延享四(一七四七)年以降であり、延享五(一八四八)年春頃と推定する(第二十一回国際浮世絵学会口頭発表「合羽摺の黎明―大津絵と浄瑠璃絵尽しの包紙」(二〇一九年六月))。柏原屋板の『明朝紫硯』は、上中巻のみであり、下巻は「嗣出」とされたまま刊行されなかったと思われる。後に菱谷孫兵衛が求板し、下巻を揃えて文化十(一八一四)年に刊行している。

(3) 元禄期に京都の書肆である金屋平右衛門より刊行された大森善清絵本の板木は、金屋の廃業後に他書肆へと移った。寛政二(一七九〇)年改正『板木総目録株帳』によれば、柏原屋は、『絵本深山鹿』『絵本琵琶海』『絵本扇ながし』『絵本壬生狂言』『絵本乗合船』の五作品の板木を有している。このことについては既に浅野秀剛氏の指摘があり、浅野氏は柏原屋の絵本広告から、『絵本深山鹿』の板木のみを享保期から有しており、他四作品は安永・天明期に求板したと推測する。「大森善清絵本の後修本」『浮世絵芸術』一六二号(一九六九) 四九―七二頁

(4) 『画筌』の初版は享保六(一七二二)年、大坂の伊丹屋茂兵衛、伊丹屋新兵衛より刊行されている。柏原屋の刊記を持つ伝本は大英博物館蔵本、カリフォルニア大学パークレイ校東亜図書館蔵本に確認されるが共に刊年を記さない。管見の限り延享二(一七四五)年以

- 降の成立と推測される柏原屋の絵本広告（公文教育研究会蔵『絵本通宝志』等に所収）以降に『画筌』の書名が確認できることから、柏原屋による求板時期は延享二（一七四五）年頃であると考ええる。
- (5) 書誌を軸とした絵本分析の論考として、菱谷孫兵衛の絵本を取り上げた、伊藤紫織「画譜、絵本の出版をめぐる三つの事例―菱谷孫兵衛の活動に注目して―」（『採蓮』一一号（二〇〇八）一一―一二九頁）がある。
- (6) 広告では、『絵本写錦袋』と題された作品が「近日出来仕候」として並ぶが、これは、既述の『絵本写宝袋』（享保五（一七二〇）年刊）が「写錦袋前編」の柱題を持つことから、刊行前に予定されていた『絵本写宝袋』の書名であったと考えられる。また、広告では『絵本写錦袋』は全二十冊での刊行が予告されているが、実際に刊行された『絵本写宝袋』は全十冊である。これは、享保十四（一七二九）年に刊行された『絵本通宝志』が十冊の形式で「写錦袋後編」の柱題を持つことから、当初の二十冊刊行予定であったものを、何かしらの理由によって前編の『絵本写宝袋』、後編の『絵本通宝志』という形に変えて出版したものと推定される。中野幸一氏は、後述『絵本草原氏』③早稲田二本に対する改題で、図1の広告内容より、「初期の柏原屋絵本の計）八部二十冊を「絵本写錦袋」としてセットで売り出したのであろう」と解釈するが、上記の理由から『絵本写錦袋』は広告掲載の作品と別であると考えた方が良いだろう。（中野幸一編『九曜文庫蔵源氏物語享受資料影印叢書12 紫文蚕之囀・源氏大和絵鑑・絵本草原氏・絵本富士の縁』（勉誠出版 二〇〇九）十五頁）
- (7) 『絵本草原氏』早稲田二本添付の広告には、『絵本志草』以下十五点の広告を載せる。掲載作品中最新のものとして『雛形宿の梅』の開板願いが享保十五年に提出されているため（大阪市立中之島図書館蔵『開版御願書扣』による）、これ以降の成立であると考えられる。
- (8) 吉田幸一編『古典文庫 源氏物語 十四（伏見天皇本）』（古典文庫、一九九五）三六四―三六五頁。
- (9) 増補となる箇所は、「畫」山水木石法」と題された山水の画法に関する記述だが、これは唐代に成立した荆浩著『畫山水賦』の一節を引用し、和文の注を付したものとなる。
- (10) 丸山伸彦『江戸モードの誕生』（角川選書、二〇〇八）一四〇―一四四頁。
- (11) 「板木師」の語は『日本国語大辞典』に「版木を彫ることを業とする人」の意として立項されるが、本書の記述はこの意味では取り難い。
- (12) 『絵本手帳綱目』下巻十七丁表に描かれる「駒鳥」、「鶉」、「鶯」の図は、伝存する『絵本清書帳』に描かれていない。作品の前後関係については、字体が一致しており「駒鳥」等の図が後の増補とは考え難いことから、『絵本手帳綱目』が先行すると考えた。
- (13) 同注7 広告。
- (14) ただし、公文教育研究会蔵『絵本通宝志』等に貼付される延享二（一七四五）年以降成立の広告には「鳥けたもの不残のす」とあり、虫や魚に関する記述がない例が複数確認される。
- (15) 外題簽が欠けているためか、国立国会図書館は本書の書名を「鳥類絵抄」としているが、内容は『絵本清書帳』下巻、『絵本手帳綱目』下巻と一致する。本書は注11に述べる図を欠くため、『絵本手帳綱目』ではなく『絵本清書帳』下巻に相当すると判断した。
- (16) 『絵本志草』以下二十九点の作品が掲載される。宝暦五（一七五五）年刊『絵本野山草』が載ることから、以降の成立であると考えた。
- (17) 一丁表から十丁裏までが『絵本手帳綱目』①石川歴博本の図様と一致し、十一丁裏から十二丁裏にかけて描かれる「蒲公英」以下十五図が『絵本手帳綱目』②個人蔵本の草木図部分と一致する。十一丁表「秋葵」の図は『絵本手帳綱目』伝本に同図を見ないが、『絵本手帳綱目』①石川歴博本の欠損部分に相当する可能性もある。
- (18) 同注7 広告。
- (19) 公文教育研究会蔵本『絵本通宝志』（享保十四（一七二九）年刊、KUMON0584）等に貼付の広告による。本広告は『絵本萬寶全書』以下二十三点の作品を掲載し、延享二（一七四五）年刊の『絵本直指宝』が最新となる事から、これ以降の成立であると判断できる。
- (20) 立命館アートリサーチセンター蔵『雛形鶴の声』（享保十（一七二五）年刊）（所蔵先データベースには『雛形天橋立』の書名で登録されている。）等に貼付される。広告掲載作品中、同書『雛形鶴の声』が最新の刊行であり、享保十二（一七二七）年刊の『雛形天橋立』が未刻として掲載されている。これらことから、本広告は享保十年

から十二年の間に成立したと考えられる。

(21) 同注7広告。

(22) 『絵本たから蔵』の伝本については、ポストン美術館のデータベースより参照した。以下にURLを載せる。(二〇一九年九月十九日現在)

① : <https://collections.mfa.org/objects/531375>

② : <https://collections.mfa.org/objects/531376>

(23) 同注18広告。

(24) 同注19広告。

(25) 同注7広告。

(26) 書名は外題簽による。『絵本忘草』は外題簽左下に巻数、『絵本ふくら雀』は左下に「全」と記される。

(27) この改修に伴い、序文等が削られたことよって丁付にずれが生じている。既述の通り、①内藤本の上巻七丁目には「七ノ十二」と飛丁が確認できるが、この「十二」は改修前(④国会ii本)における丁付と一致する。

(28) ④国会ii本の「松」「櫻」を載せた板木を使用しなかった意図は、狸々図を追加することにあつたと推測される。同じく巻一の一丁目表に狸々図を掲載する絵本は、『絵本初心柱立』(正徳五(一七一五)年刊、寛政六(一七九四)年再刻、小林喜右衛門(京都)・今井七郎兵衛(京都)、宝暦十一(一七六一)年再刻版には柏原屋が相板に加わる)、『写生獣図画』(享保四(一七一九)年刊、享和三(一八〇三)年再刻、柏原屋清右衛門・菊屋七郎兵衛(京都)等にも確認できる。『絵本忘草』を含め、いずれも京都の書肆である菊屋(今井)が関わっている点興味深い。本稿では指摘にとどめる。また、『絵本忘草』改修後の「松」図は、『絵本初心柱立』下巻一丁目表に描かれる「松」と同じ図様である。

(29) 長友千代治編『重宝記資料集成』第三十七巻(臨川書店、二〇〇七)。
(30) リチャード・レイン「延宝期大判秘画帖・解説」『季刊浮世絵』六六号(一九七六)。

(31) 浅野秀剛「講演 十七世紀の絵入版本の絵師について」『ビブリア』一三六号(二〇一一)三三三三二頁。

(32) 同注30。

(33) 『大阪本屋仲間記録』第九卷(大阪府立中之島図書館、一九八二)一五頁より引用。

(34) 図録解説「人物草画」大和文華館特別展覧会図録『没後三〇〇年画僧古蹟』(二〇一七)。

(35) 浅野秀剛「大森善清絵本の後修本」『浮世絵芸術』一六二号(一九六九)、五一頁。

図版一覧

図1・3、21、28…国文学研究資料館蔵『絵本草源氏』(請求記号:12-494、DOI:10.20730/20003393)

図4、5、22、30…国立国会図書館蔵『絵本稽古帳』(請求記号:237-114)

図6、23…石川県立歴史博物館蔵『絵本手帳綱目』(請求記号:720-5)

図7、20…早稲田大学図書館蔵『絵本手帳綱目』(請求記号:文庫31/E0445)

図8・11、29…都立中央図書館蔵『絵本清書帳』(請求記号:加4812)

図12、13、24、31…ポストン美術館蔵『絵本たから蔵』

図14、25…都立中央図書館蔵『絵本忘草』(請求記号:加4674)

図15…岩国徴古館蔵『絵本忘草』

図16、17…国立国会図書館蔵『絵本忘草』(請求記号:特7-553)

図18、19…福井市立図書館蔵『万物絵本大重宝記』、長友千代治編『重宝記資料集成』第三十七巻(臨川書店、二〇〇七)より引用。

図26…早稲田大学図書館蔵『絵本草源氏』(請求記号:文庫30/A0337)

図27…国立国会図書館蔵『絵本清書帳』(請求記号:W166-N12)

二〇一九年九月三〇日 受付

二〇一九年二月一〇日 採択決定

付表 初期柏原屋絵本の成立過程についての推測

	絵本草源氏	絵本稽古帳	絵本手帳綱目	絵本清書帳	絵本たから蔵	絵本忘草	絵本ふくらすゝめ	万物絵本大全
求板前	不明	〈未確認〉 板元不明、巻冊不明。 「山水之図」を含まない。	正徳五年に山田氏、刊年不明だが天王寺屋一郎兵衛らの刊行を確認。巻冊不明。	不明	不明	〈未確認か〉 板元不明、巻冊不明	〈未確認〉 板元不明、巻冊不明	村上源兵衛ら刊。 二巻二冊本形式。
求板後 享保5 以前	〈未確認〉 二冊本形式	三巻三冊本形式。 「山水之図」を増補する。	〈未確認〉 二冊本形式。	〈未確認〉 四冊本形式。改修前の『絵本手帳綱目』と別書を取り合わせる。	二巻二冊本形式。	〈未確認か〉 三冊本形式。	〈未確認〉 二冊本形式。	〈未確認〉 二冊本形式。
改修後 享保5 以後	二巻一冊本形式。 (享保5～享保10年修か)	三巻三冊本形式。 「山水之図」を増補する。	二冊本形式。柏原屋による後修本『絵本清書帳』上下巻の取り合わせか。	三巻三冊本形式。改修により、求板前『絵本手帳綱目』と別書が取り合わせられる。(享保10～享保15年修か)	二巻二冊本形式。	i : 三巻一冊本形式。序文、目録を削除し、図様を差し替える。 ii : 五巻一冊本形式。 『絵本ふくらすゝめ』と合綴。 (享保15～延享2年修か)	i : 〈未確認〉二冊本形式 ii : 五巻一冊本形式。 『絵本忘草』と合綴。 (享保15～延享2年修か)	〈未確認〉 二冊本形式。
備考						『絵本忘草』⑤は、上存で刊記を欠くため、求板前後のいずれのものか不明。また、iの改修が求板後の三冊本においてなされている。		柏原屋の刊記を持つ伝本は未見。

Kashiwara-ya and Its Early Ehon

KOMEIJI Tatsuki

Department of Regional Studies,
School of Cultural and Social Studies,
The Graduate University for Advanced Studies, SOKENDAI

Summary

Kashiwara-ya is an Osaka bookstore well-known for publishing Otogi-bunko, a collection of illustrated short stories called Shibukawa-ban, in the Edo period. The bookstore also published many ehon, or books featuring illustrations, that are significant works for ehon studies including Ehon-Shahoubukuro and Minchoshiken. Although Kashiwara-ya played an important role in publishing ehon after the Kyoho era, preceding studies have not considered Kashiwara-ya as a publisher of ehon. Thus, this study investigates Kashiwara-ya's early works and considers its publication activity.

Eight books—Ehon-kusagenji, Ehon-seishocho, Ehon-keikocho, Ehon-takaragura, Ehon-techokomoku, Ehon-wasuregusa, Ehon-fukurasuzume and Banbutsu-ehon-taizen—are listed in a Kashiwara-ya advertisement published before 1720. This paper considers these books to be Kashiwara-ya's early works. These books were published to provide patterns of paintings for artists. Since this has rarely been examined in preceding studies, this paper compiles a bibliography and identifies the characteristics of these early works.

The paper first organizes a bibliography of each work and makes inferences, e.g. woodblocks of Ehon-techokomoku were bought by Kashiwara-ya and the bookstore repaired them to sell them as Ehon-seishocho. As a result of such inferences and mismatches in the composition of the eight books, it is also possible to ascertain the possibility that almost all the woodblocks used in Kashiwara-ya's early works were repaired after purchase, i.e. these early works were not made by Kashiwara-ya.

Secondly, the paper analyzes diversity in publication dates. Although Kashiwara-ya's early works have same publication date of 1718, these descriptions are unreliable because the woodblocks of the publication dates were allocated among o-hon, one of the formats of Japanese books. The degrees of frictional wear of the woodblocks are different, and this difference tells us the sequence of printing.

A hypothesis concerning Kashiwara-ya's early works is derived based on the above. Although Kashiwara-ya had woodblocks to publish eight ehon and had rights to publish them before 1718, the eight books were not published at the same time.

Key words: Kashiwara-ya, Ehon, Edehon, Gahu, Japanese design books, publishing works in Edo period, woodblock printed book, bookstore in Osaka, painting motif

